

昔むかし、あるところに、ひとりのおじいさんがいました。おじいさんは、七十頭の赤い雌牛と、曲がった角の黄色い雄牛を一頭飼っていました。それで、おじいさんは、みんなから、七十持ちのじいさんとよばれていました。

ある日のこと、七十持ちのじいさんは、草原で、牛たちに水を飲ませていました。そこへ、いきなり、黒い巨人がやってきました。巨人は、頭が十個、うでが十本ありました。巨人は、おじいさんにいました。

「七十持ちのじいさんよ。おまえは、七十頭の赤い雌牛が好きかね。曲がった角の黄色い雄牛が好きかね。それとも、七十頭のベーコンが好きかね」

おじいさんは答えました。

「わしは、七十持ちのじいだもの。そりゃあ七十頭の赤い雌牛が好きさ。曲がった角の黄色い雄牛が好きさ。だが、七十頭のベーコンなら、あんたにあげよう。だから、トンダイ殿の所に行つて、飛び出しナイフをもらつてきておくれ」

巨人は、

「よし。トンダイ殿の飛び出しナイフをもらつて来てやろう」といつて、出かけようとなりました。すると、おじいさんがいました。

「ああ、そのまえに、バンダイ殿の所に行つて、トンダイ殿の飛び出しナイフを研ぐための砥石を借りてきておくれ」

「よし。さきに、バンダイ殿の所へ行つて、砥石を借りて来てやろう」

「ああ、バンダイ殿の砥石を運ぶには、ハンダイ殿の荷車がいるぞ」

「よし、では、ハンダイ殿の所に行つて、荷車を借りて来てやろう」

「だが、ハンダイ殿の荷車を引くには、タンダイ殿の白い雄牛がなくてはならん」

「よし、じゃあさきに、タンダイ殿の所に行つて、白い雄牛を借りて来てやる」

「おつと、タンダイ殿の白い雄牛をつかまえるには、オンダイ殿の投げ縄がなくてはならんぞ」

「わかつた。では、オンダイ殿の投げ縄をもらつてきてやろう」

七十持ちのじいさんは、

「だがなあ、オンダイ殿の投げ縄は、大きな海のむこう岸にあるんだよ」といいました。巨人は、

「どうやったら、その投げ縄を取りに行けるんだ」とききました。

「オンダイ殿の投げ縄を取つて来るには、まず重い石を首にくくりつけて、それから海の中を泳いで渡らなくてはならないよ」

巨人は、さっそく、重い石を首にくくりつけて、水に飛びこみ、おぼれて死んでしまいましたときさ。

原話…『世界の民話21モンゴル・シベリア』小澤俊夫編訳／ぎょうせい

再話…村上郁

